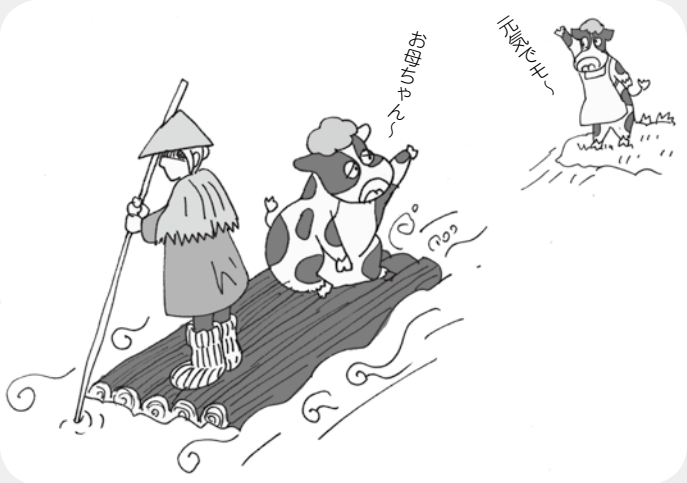
親離れ・子離れ

ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社中国支店　獣医師　中尾 継幸（なかお つぐゆき）氏

以前にNHKのテレビ番組「オトナへのトビラ」にて「親離れ」の特集が放映され、様々な野生動物の親離れの様子が紹介されていました。例えばキタキツネの母親は子供が三か月になると狩りの特訓にて獲物を捕まえる方法を伝授します。しかしその後二か月が経過すると、突然母親は子供を自分の縄張りから追い出し、他のキツネと同様に全く他人の存在となってしまうのです。またラッコの場合、生後六か月になると母親はいつもお腹の上に乗せていた子供を置き去りにして姿を消してしまいます。しかし数日後にはそんな置き去りにされた子供二匹が出合って共に生活を始める場面を認め、この現象を番組では「子供同士が助け合いながら、群で生活するルールをお互いに学び合う」と解説していました。

酪農では生まれて母牛が子牛を舐める＝「リッキング」の直後に、飼い主である人間によって母子分離させることが推奨されています。これは感染等の衛生上の他、初乳の確実な給与や、その後の哺乳作業にて人間こそ本当の親であると子牛に認識させる意義も持ちます。では「親離れ」の観点からみた場合、母子分離を生後直ちに行った場合と、しばらく同居の後に行った場合とではどのような違いが見られるのでしょうか。子牛を母親から生後直後および十四日齢時に分離してその後の様子を比較した行動調査では、後者の方が頻繁に鳴き声を上げ、ペンの中を動き回るといった不安を示す行動が多く認められました。



つまり遅い時期での母子分離は『精神的』ストレスが大きいと考えられ、衛生面のみならず精神面でも分離は生後直ぐの方が好ましいと言えます。一方でこれらの子牛をその後六週齢時に初対面の子牛の中に混合すると、十四日齢分離の方が他の子牛に対する積極的な社会的行動が認められました。このように生後しばらく母親ともに一緒に過ごすことで、子牛の『協調性』が養われることも事実であり、牛においても、親離れまでに子牛が社会の中で生きるための能力を育成するという、母親の役割が明らかになりつつあるようです。

これら動物に対し、スイスの生物学者・ポルトマンは著書『人間はどこまで動物か』の中で「人間は生後一歳にて、真の哺乳類が生まれた時に実現している発育状態にようやくたどり着く」と言い、このことを「生理的早産」と呼びました。そして「十一か月も早産する人間は、直ちに強力な保護を必要とする」と述べ、この早産の理由こそが、言葉や直立歩行といった人間独自の基本的能力を習得するためだと考えました。十一か月後にようやく『真の意味で』生まれる人間の子供が、その後さらに親離れするまでには、他の動物とは比較にならない、十～二十年という長期間を必要とするのも当然のことなのかもしれません。